國語

第五学年

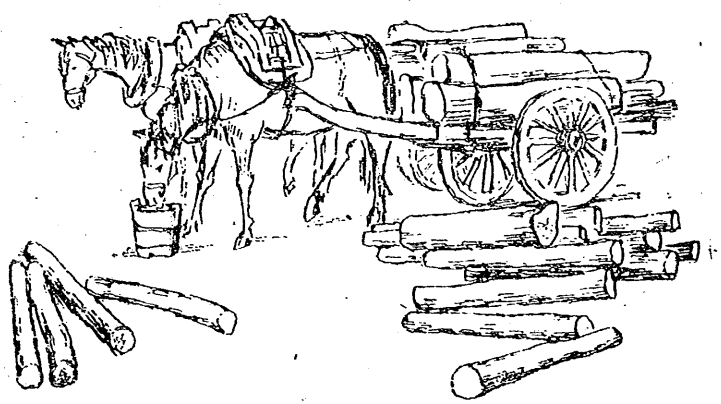
上

K160.8
1
10

國語

第五学年

上



國立國語研究所
圖書
教育圖書館藏書

もくろく

一　美しいもの……四

二　ことばの愛……七

少年・少女

自分の國のことば

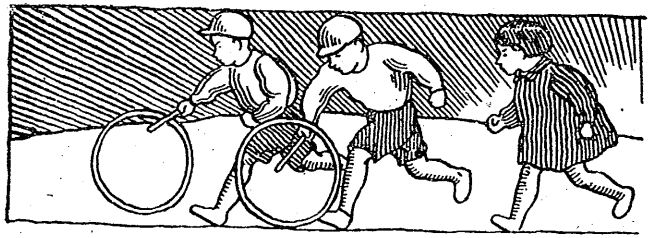
三　日の光……十八

四　あなたの思っていることは……二十七

（一）

（二）

（三）



五　発明二つ……三十二

自動織機

眞珠

六　私の妹……四十七

妹のことば

新しい世界

妹の作文

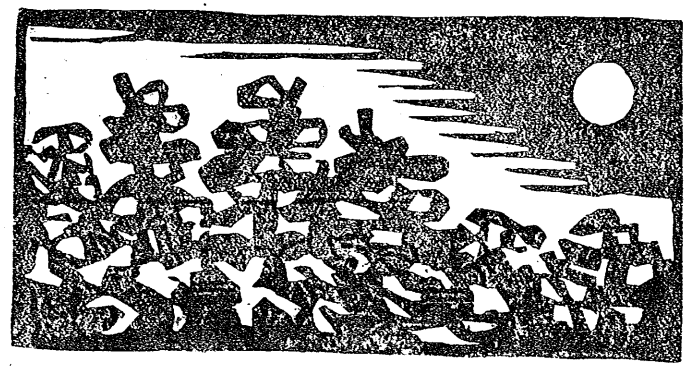
七　ぶす……六十二

能と狂言について

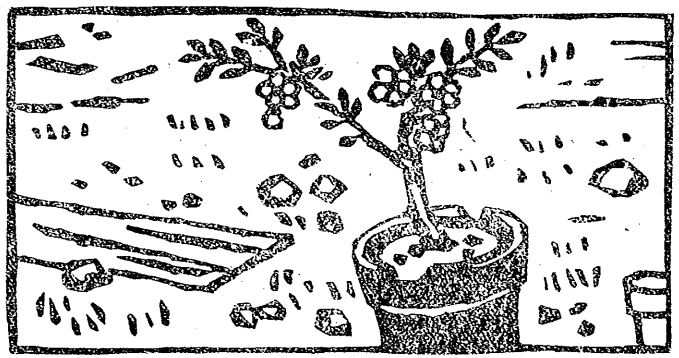
狂言「ぶす」

一　美しいもの

青空の美しさ、
朝明けの空、夕やけの空の美しさ、
月の夜、星の夜の美しさ。
いまも、美しいものはどこにでもある。
高い木が大きく枝をはって、
わかめをだしかけたこずえのさきが、
かすんだ空の中にとけこんでいる。
じつに美しい。



小鳥が鳴いている。
風が、かすかに耳もとをすぎる。
耳をすますと、なにか、かすかな音楽がきこえてくるようだ。
どこからきこえるともないが、どこからかきこえてくる。
美しいものは、いまも、どこにでもある。
ただ、その美しいものを、すなおに感じとる心を、われわれは失っている。
毎日の生活のらんざつどあわただし

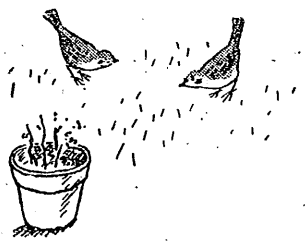


さの中に、それを失っている。

しかし、われわれは、いつでも、どこにでも、その美しいものを、すなおに感じとる心を、もちつづけたいものである。

心がけひとつである。

心がけひとつで、われわれは、どんなにでも毎日の生活を、ゆたかに、楽しくすることができる。



二　ことばの愛

少年・少女

おとうさんが、フランスのいなかへいったときは、子どもが大ぜい、めずらしそうについてきて困りました。そういういなかへは、めったに日本人もいかないのです。日本人をみたことがない子どもたちは、おとうさんが通るたびに、目をまるくしました。おとうさんの歩いていくそばを、足ばやにかけぬけていって、てんでに、おとうさんの顔をのぞきこむようにしました。

こんなにうるさくついてこられたときには、おとうさんも困りましたので、子どもをさけて通ったこともありました。

しかし、おとうさんは、子どもと遊ぶことがすきですから、道で子どもたちが、なわとびをして遊んでいたりしますと、そのなかまいりをして、なわをまわしてやったこともありました。

二月半ばかり、いなかでくらすうちに、おとうさんには、子どものお友だちができました。

そういう子どもの中には、道でおとうさんを呼びとめて、

「日本人、くりをおあがり」。

といいながら、おとうさんにわけてくれる少女もありました。

あのとげとげしたいががわれて、じゅくしたくりの実の落ちるころでしたから。

おとうさんは、知らない外國人どうしでも、こんなに親しみをもつことができるものかと思いました。その少女のわけてくれたくりは、むじゃきな心からでた、子どもらしい愛情のしるしでした。

ちょうど、プラタナスという木の葉が黄色くなるころで、いなかの子どもにとっては、もっとも楽しい季節でした。どこへ

いっても、遊びたわむれている子どもにあいました。

そのいなかの町には、ボンナフという石の橋があって、イエンヌという川が、その下を流れていました。

岸にある丘の上には、センテチェンヌというお寺の高いとうもみえました。

そのあたりは、フランスの國道にそった景色のよいところですから、橋のたもとの休み茶屋へは、おとうさんもよくいってこしかけました。その橋のたもとにあるプラタナスのなみ木の下で、おとうさんは、三人のかわいらしい少女にもあいました。

みあげるように高いプラタナスの枝からは、黄色い葉が、毎日のように落ちました。三人の少女は、その葉をひろい集めて、橋のたもとの石がきのところへきては、遊んでいました。おと

うさんが、休み茶屋のまえにこしかけて、コーヒーをわかしてもらっていますと、きまって、その少女たちも遊びにきています。いずれも、八つばかりの子どもたちでした。

ある日のこと、おとうさんが、子どものすきそうなおかしを、一ふくろやったのがはじまりで、その少女たちは、おとうさんのそばへくるようになりました。ひろい集めた落ち葉を持ってきて、おとうさんにくれるようになりました。

プラタナスの葉の大きいのは、やつでほどもありました。

「旅の記念として、本のあいだへでもはさんでおきたいのです。なるべく、小さな葉をくれませんか。」

と、おとうさんが頼みましたら、少女たちは、手をとりあってとんでいって、小さなのをえらんで、ひろってきてくれました。

こうして、ずんずんおとうさんのそばへきて、さまざまなことを話しかけたり、わらったりしました。けれども、お友だちにさそわれても、どうしてもおとうさんのそばへこない女の子もありました。

「おお、こわい。」

と、ひとりの少女が、おとうさんをみてそういいました。

「おいで、わたしといっしょにお話をしておくれ。ちょうどあなたたちと同じ年ぐらいな子どもを、わたしは、自分の國に

のこしておいてきました。わたしは、そんなにこわいものではありませんよ。」

おとうさんがいいました。

それから、三人の少女に、歌を歌ってほしいと頼みました。方言でできた小歌のあることを、おとうさんは、きいて知っていましたから。

少女たちは、おとうさんのこしかけているそばで、コーヒー茶わんのおいてあるテーブルをかこんで、いなかの歌を歌ってきかせてくれました。

なんとかわいらしい子どもたちではありませんか。あんないなかはつまらないと、わるくいう旅人もありますが、おとうさんがそのいなか町がすきになったのも、一つは、そういうかわ

いらしい子どもがいて、なかよしになってくれたからです。

ビエンヌという川の岸には、手ぬぐいのようなものをかぶった女の人たちが、ならんでせんたくをしていました。フランスのいなかによくみかける、赤いかわら屋根の家が、川の水にうつっていました。その川の岸で、おとうさんは、ひとりの少年にもあいました。

たぶん、その少年は、小学校のいちばん上の学年か、または、そのいなか町にある商業学校の下の学年ぐらいでしたでしょう。おとうさんのそばへきて、あいさつをしてから、

「日本とフランスとは、どちらがきれいですか。」

とたずねました。

この少年の問には、ちょっとおとうさんも困りました。フランスだって、きれいなところもあり、きたないところもあり、日本も、やはりそのとおりですから。おとうさんがしょうじきにその答をしましたら、少年は、さらにこんなことをいいました。

「日本の海はどんな色ですか。」

「それはすきとおった青い色ですよ。」

と、おとうさんが、力をいれて答えました。

この返事に、少年も満足したらしく、

「ああ、すきとおった青い色ですか。」

と、日本の海の美しさを、思いうかべるようにいいました。フランスのいなかの子どもから、自分の國のことをきかれたときは、おとうさんもうれしく思いました。かしこそうな目つきの少年でした。

自分の國のことば

「おとうさん。

と、太郎がそばへきて、外國ではどんなことばを話すかとたずねるものですから、「そりゃあ、フランスではフランスのことば、イギリスではイギリスのことばを話すよ」と、おとうさんがいってきかせました。

「子どもでも。

と、また太郎がたずねましたので、おとうさんは答えました。

「太郎よ、フランスでは、さかな屋さんでも、やお屋さんでも、みんなフランス語です。えんぴつ一本買いにいくにも、日本のことばでは通じません。『こんにちは』なんていったって、だれもわかるものがありません。

そういう遠い國へいくと、自分の國のことばがこいしくなります。こうしておまえたちに話すようなことばが、思うぞんぶんつかってみたくなります。わたしは、外國でくらしてみて、つくづくと、自分の國のことばのありがたみを知りました。おまえたちは、おさな心にも、ことばを愛することを知って、勉強したら、どんなにしあわせでしょう」。

三　日の光

1　黒い雲が流れてくる。はげしいに
わか雨。暗い木立。

2　いけのおもてにはじける雨あし。
竹の葉さきからしたたるしずく。
その下で、きょとんとしている
あまがえる。

3　わら屋根ののきから、たきのよ
うに落ちる雨水。
その下で、雨やどりをしている

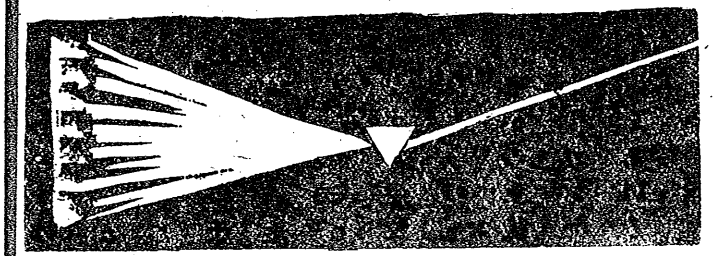
にわとりのむれ。

4　小学校のかわら屋根から雨がしたたる。だんだんまどおに
なる。「ことばの愛」を読んでいる声が、きこえてくる。

5　ひとりの子どもが、立って本を読んでいる。友だちの顔、
顔、顔。先生の横顔。

6　また、「ことばの愛」のつぎの一節を読んでいる声がきこえる。
もうあ学校の教室である。
ひとりの生徒が、席にすわったまま、点字を読んでいる。
ほかの生徒の指さきが、すばやく点字の上をすべっていく。

7　オルガンがひびいてくる。
窓をあける女の先生。
「あ、きれいなにじ」。



8 村の林の上に、大きな半円形のにじがかかっている。

9 「にじの歌」を歌う子どもの声。

暗室。

「さあ、その白いかべに、プリズムでわけた光を写してみますよ。

という先生の声とともに、七色の光が写しだされる。

「ただ白っぽくみえる太陽の光線ですが、わけてみると、こんなにさまざまな色になります。」

10 せんたく物のほし場。

まえかけや、しきふや、ハンケチなどが、風にゆれている。

その下を、あひるがならんで通っていく。

そのあとから、小さな子どもが、よちよちと歩いてくる。

母親が、両手をのばしてついてくる。

11 病院の庭さき。

看護婦がもうふをほしている。

男の子がベッドにすわっている。

「おかあさん、雨がはれてきれいね。

窓に花のはちをおきながら、

「ごらん、にじがでているよ。

窓をのぞく子どものはればれした顔。

「早く、あの野原で、遊びたいな。

「もうじきですよ。
「お友だち、どうしているかな」。

12 ひとりの友だちは、水えのぐで写生をしている。
光る白い雲、遠い山のみね、村の道。
やえざくらの花。

13 ひとりの友だちは、その兄といっしょに種まきをしている。
きれいにたがやされた畑。
田をならしている農夫。

14 ひとりの友だちは、妹をつれて、つつみの上でつみ草をしている。

「春の小川」の歌がひびいてくる。
小川の水、きらきら光る。

15 いちめんのなの花。
ひとりの女の子が、「なのはな、なのはな、まつのき」と、
「ごくご一」の文を大きな声で歌う。
自轉車に乗った中学生が、ふたりづれでなの花畑を横ぎる。

16 ひとりの友だちは、母といっしょに汽車に乗っている。
窓からみえる村の家、まつなみ木、竹やぶ。
新しい家のたった町、ふみきりばんのおじいさん。
トンネル。

17 ひらけて、海。長い海岸線、うちよせる波、おきの漁船、
島。

18

炭坑の風景。

エレベーターをあやつる大きな車輪が、まわっている。

トロッコをおして、炭坑にはいっていく工員。

ヘッドライトにたよって現場に近づく。

地下水の流れ。その流れのかすかな音。

石炭の坑道。工員たちは、さくがん機やつるはしを持って、

石炭をぼっている。

19

あせまみれになった工員の顔、胸、うで。

たくましい音楽。

くずれくだける石炭、シャベルですくう

石炭。

20

みるまに、トロッコにつまれる石炭の山。

21

おしだされてくるトロッコ。

ごうごうたるトロッコのひびき。

ひとりの工員がしごとをすませて、坑内

から地上にでてくる。

まぶしい日光。

22

坂道を、ゆっくりとした足どりで、家に

帰ってくる。道ばたにさくたんぽぽ、と

びかうちょうちょ。

立ちどまって、両手をひろげて深呼吸。

23

「おとうさん。」と呼ぶ声。

その声をきいて、にっこりとわらう顔。

「おうい。」

また、「おとうさん。」とさけぶ。

「おうい。」

工員も走りだす。

24

男の子が、むちゅうになってかけてくる。

工員は男の子をだきあげる。

ふたりのうれしそうな顔。

日の光をいっぱいに受けた、はればれとした父と子。

四　あなたの思っていることは

（一）

ぼくは、いままでに学んだ自然の観察を、ずっとつづけていきたいと思います。

わざわざ遠くにでかけなくても、ふだん自分の身のまわりにあるものを、よくしらべてみる心がまえを、つくりたいと思います。庭の木に小鳥がくれば、その鳴き声や、とまりかたや、動きかたや、羽の色や、形などを、こまかにしらべたいのです。

トマトが畑に植えてあれば、そののびかたや、花のさきかたや、実のなりかたなどを、たんねんにみようと思います。

また、くもがのきに巣をかけることがあれば、巣のはりかた

などを、しらべておきたいと思います。

こんな動植物だけではなく、雪のようすや、星の世界なども、しらべていきたいと思います。

観察すればするほど、自然のおもしろさもわかり、そのふしぎなことにうたれ、美しさにおどろくにちがいありません。

（二）

私は、同じものをみるにしても、どうしてそのものがこうなったかということを、考えてしらべたいと思っています。

たとえば、毛糸のあみ物があれば、そのあみかたはどんなあみかたか、なぜ、このようなあみかたをしなければならなかったのか、よく考えてみたいと思います。

また、一つの和音を耳にしたときは、組みあわされた一音一音のことも、心にうかべてみたいのです。

もようをみたときには、そのもようが、どんな単位からなりたっているか、そ

れをさがしてみようと思います。

もし、弟や妹がけんかでもはじめたら、どうしてそんなことになったか、そのわけをよく考えていってみようと思います。

このように、なんでも、そのもとのことをしらべていくような心がけを、もちたいと思います。

（三）

ぼくは、みんなといっしょにはたらきたいと思います。

家では、弟たちのめんどうをみてやり、兄や姉の手助けとなりたいと思います。父や母のために、いつもすなおな子どもになりたいのです。

そうして、うちじゅうの人たちに、めいわくをかけないようにしたいと考えます。

ぼくがいるために、うちの中が明かるくなるように、できないものでしょうか。ぼくがいるので、みんな楽しい氣持になるようにできないものでしょうか。

学校では、組の友だちとなかよくして、助けあっていきたいと思います。かげで人のわるロをいわないようにしたいし、自分のもっているいいところを、えんりょしないであらわし、友だちのいいところを、すなおに学んでいきたいと思います。

自分をえらそうにみせかけたり、人をだましたりしないで、ありのままのすがたで、つきあっていきたいのです。

ぼくは、学校の生徒のひとりとして、りっぱにそのつとめをはたし、自分ひとりぐらいどうでもいいというような、無責任

な、ひきょうな考えをもちたくはありません。

ぼくは、この学校では、かけがえのないひとりであることを、ほこるようになりたいものです。

いつも、全体の中の部分、部分があっての全体、というつながりをわすれないで、あいての人をうやまうとともに、自分のつとめをはたすだけの勇氣を、もちたいと考えます。

五　発明二つ

自動織機

「はたばかりいじっていて、おかしなやつだ。男のくせに」。

豊田佐吉は、村の人々から、こういってあざけられた。佐吉は、父の大工のしごとを助けてはたらいていたが、ひまさえあれば、織機のことをしらべつづけていたのである。

村じゅうの者から氣ちがいあつかいにされるのをみて、父は、

「おまえは大工のせがれだ。ほかのことを考えないで、みっちりしごとをやってくれ」。

とさとしたが、佐吉のもえるような研究熱は、どうすることもできなかった。それで、父は、佐吉の心をいれかえさせるために、佐吉をよその大工の家にあずけてしまった。

このあいだに立って、佐吉をはげましたり、なぐさめたりしたのは、母であった。

佐吉の考えはこうである。人間の衣食住というものは、みんなたいせつなものであるから、ぬのを織るしごとも、けっして

ゆるがせにしてはおかれない。いまのようなぬのの織りかたをしていたのでは、やがて、困るときがくるにちがいない。そのために、いまのうちに、早く織機を進歩させておかなければならない、というのである。

佐吉が、はじめに目をつけたのは、ぬのを織るとき、たて糸のあいだをぬっていく横糸であった。横糸はおさによって、右から左、左から右へといききするのであるが、これを人の手によらず、機械の力で動かすようにしたかった。機械で動かせば、もっと早く織ることができるし、ひとりでに、ぬのがずんずん織られていくからである。

佐吉の考えは、しだいに高まっていったが、小学校をでただけのかれには、手のとどきそうもない空想になりがちであった。

たまたま、そのころ、東京(とうきょう)にはくらん会が開かれた。佐吉は、上京して機械館へ毎日かよった。銀色に光った、たくさんの機械は、生きもののように動いていた。かれは、そのりっぱな機械をみて、感心するとともに、なんともいえないかた身のせまい思いがした。機械は、どれひとつとして、日本製のものは、なかったからである。

「こんなことでいいのか。日本のゆくすえをどうするのか」

佐吉は、もう、じっとしていられなくなり、設計図をひいては組みたて、組みたてては動かしてみた。だが、思うように動くものは、なかなか生まれなかった。

佐吉は、一けんの小屋に閉じこもって、いっしんに考えぬき、これならという一台の機械を作りあげた。これも、まんまと失

敗であった。世間からはますますわらわれて、だれひとりあいてにしてくれなくなり、まずしさはいよいよせまってくる。

かれは、勇氣をふるいおこして、夜も晝もなく考えとおし、いままでの失敗のもとをとりのぞいて、新しい設計図をこしらえあげた。そこでやっと、思いどおりの機械ができあがった。

ためしてみると、はたしてよく動いた。

村の人たちは、ぬのをみごとに織っていく、ふしぎな機械に目をみはりながら、

「よくやった。」

「えらいものだ。」

といってほめたたえた。試運轉の日、その織機をあやつって、りっぱにぬのを織ってみせたのは、佐吉の母であった。それは、

明治二十三年、佐吉が二十四オのときのことである。

あくる年から、豊田式人力織機は、國内につかわれるようになったが、かれは、これに満足せず、すぐ、動力機械を作ることにとりかかった。そこでさらに、七年間のくふうがつづけられ、みごとに、自動織機ができあがった。これが、日本における自動織機のはじめである。

日本の新しい出発にあたっても、この自動織機が、どれほど大きな役わりをはたすことであろう。

眞珠

「美しい眞珠、世界じゅうの人から愛される眞珠、これを、人

工で作りだすことはできないものだろうか。

一つぶの天然真珠をてのひらにのせて、大きなゆめをえがいていた、ひとりのわか者があった。

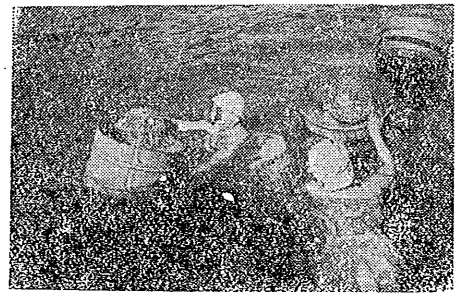
真珠は、海のそこからまれにひろいあげられる、ふしぎな宝石とされてきたが、しらべてみると、けっして、ふしぎでもなんでもないものであった。

真珠母貝の中に、砂のような小さなものがいりこみ、それに、貝のだす真珠質がまきつき、年とともに大きくなって、天然真珠となることがわかったからである。

「このわけをあてはめれば、自分のゆめも、実現できないことはあるまい。」

それから、わか者は、真珠貝の研究に全力をつくした。

このわか者こそ、のちに真珠王として世界に知られた御木本幸吉であった。



「もし、母貝の中に、核をさしいれることができたら、真珠が発生するにちがいない。」幸吉は、あわつぶほどの核をこしらえて、それを、母貝の体内にさしいれてみた。うまく貝の中に核がのこり、真珠質がまきつけば、成功するわけであったが、理論と実際とは、そうやすやすと、ひとつになるものではなかった。

だいいち、母貝は、その核をそとにはきだして、受けつけなかった。また、核をさしいれたために死ぬものもあった。たと

え、はきだしもせず、死にもしないものでも、あとで開いてみると、もどのままになっていた。

同じことをなんどもくり返してみたところで、かわりのあるはずはない。しかも、核をさしいれてから、眞珠になるまでには、少くとも四年はかかる。それが、くる年もくる年も、うまくいかなかった。

村や町の者は、幸吉のむだぼねをあざけり、そのゆめのような考えをわらった。

まわりの者から、どんなにあざけられ、からかわれても、その助力者となってくれたのは、つまのうめであった。うめは、

「きっと成功します。世界のために、きっと、あなたの願いがかないます」。

こういって、失望にしずむ幸吉を、なんどもはげました。

ある年のこと、赤しおが、おびただしく発生した。これは、ある小さな生物が、海水いちめんにふえて、海水が茶色にかわるほどになるのである。この赤しおのために、母貝はみな死んでしまった。これは、まったく考えてもみなかったことである。

かれは、新しく母貝を求めてきて、やりなおしにかかった。

町の人のかげ口は、いっそうはげしくなり、かれを氣ちがいとよび、やましとさえのしるようになった。

うめは、いつもこのわるロのたてとなって、幸吉をかばい、苦しみにたえて、なん年かをすごした。あるとき、うめが、母貝の中をしらべているうちに、一つの半円形の眞珠を発見した。

これは、まえにさしいれておいた核によって発生した半円眞

珠であることが、わかった。

「半円が真円になれば成功するのだ。半分までこぎつけた。あと半分だ」

幸吉とうめは、たがいにはげましあった。それから、真珠貝養殖の科学的研究がつづけられた。真珠貝にちょうどよい海水の温度や、海の深さのこともわかり、しおの流れの早さや、えさのよいわるいなども、はっきりしてきた。

半円真珠が思いどおりに取れるようになったので、ひとまずこれを加工して、かざり物として、ともかく、世にだすようになった。

この光明を喜んだのもつかのま、幸吉の心からの助力者であったうめが、この世をさってしまった。

そのうえ、ふたたび、赤しおがよせてきた。そのため、母貝は、ほとんど死んでしまった。その数は、じつに八十五万にもおよんだ。

しかし、幸吉は、くじけはしなかった。研究のため、死貝を一つ一つ、ていねいにしらべていった。すると、かれはきゅうにとびあがった。

「あった。あった」

ゆめにもわすれられない真円真珠が、光っているではないか。幸吉は、それこそ氣ちがいのようになって、死貝をどんどんみていった。すると、五つぶの真円真珠が現われた。八十五万から五つぶの真珠が取れたわけである。

「うめ、おまえも喜んでくれ。やっと真円真珠ができたよ」

かれは、五つぶの眞珠をいまはなきうめのれいにささげて、その成功をしらせた。

そのころ、幸吉は、すでにしらがの老人になっていた。

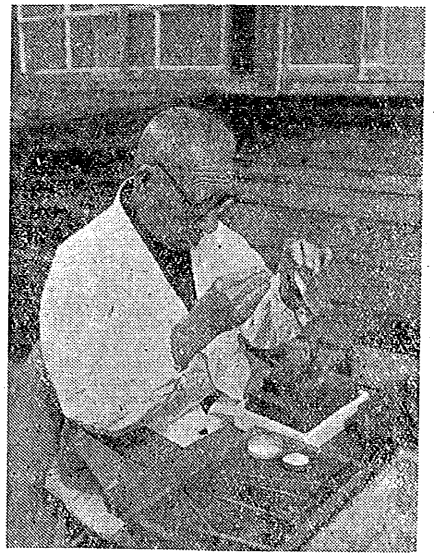
よる年なみにも負けず、研究を重ねたすえ、ついに核をさしいれるときに、ほかの母貝のがいとうまくを切り取ってきて、一種の手術をほどこすことを発見した。

「これで成功しなければ」。

幸吉は、自信をもって母貝を海中にはなった。さいわいに、赤しおもよせてこなかった。海水の温度に大きなかわりかたもなく、四年めになった。幸吉は、望みをかけた第一の母貝を開いてみた。はたして、眞円眞珠がやどっていた。第二、第三と母貝を開いていくと、どれにも眞珠が、きよらかにかがやいて

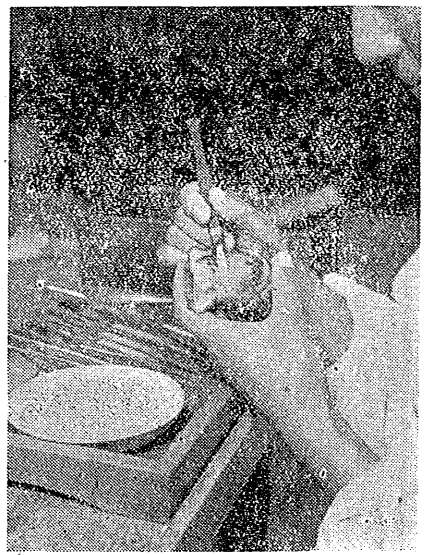
いるではないか。大きなゆめは実現された。

今日、眞珠の産地は、ペルシア湾、セイロン島をはじめとして、オーストラリアや南洋の島々であるが、日本産のものは、ことに名高い。名高くなったかげには、幸吉一生の苦心がひそんでいる。かつて、パリーの眞珠商たちが、幸吉の手になる養殖眞珠は、まがいものであるといった。しかし、世界の学者の研究によって、天然眞珠とまったく同じであることが、明らかにされた。



そののち、幸吉は、日ごろそんけいしていたエジソンのもとをたずねて、養殖眞珠のつくりかたを、こまごまと話した。エジソンはたいへん喜んで、こういった。

「わたしが、研究所でどうしてもできなかったことが、二つあります。一つは、ダイヤモンドであり、いま一つは、眞珠でした。あなたが自然をあいてとして、眞珠を世界の人々にあたえたことに、心から敬意をささげます。養殖眞珠発明の、かがやかしい、あなたの光明を太陽とするならば、作製に失敗したわたしは、星にもあたらないでしょう。」



六　私の妹

妹のことば

私は、きのう、三つになる——まんでいうと二年三ヶ月になる妹をつれて、さんぽにでました。

家から十二三分ばかり歩いたところに、廣い草原があるので、そこへつれていこうと思ったのです。

ところが、私たちの足では十二三分のところですが、妹には

そうはいきませんでした。四十分もかかったのではないかと思いました。これは、足がおそいというためばかりでなく、道ばたにあるものを、なんでもみつけて、それに話しかけたり、そこで遊んだりしたからでした。

私は、べつにいそぐこともありませんでしたので、妹の氣のすむようにして、つれていきました。

ためしに、私は、妹のいっていることばを、紙きれに書きとめてみたのです。

クロイ　ワンワン――キタナイ　ワンワンチャン

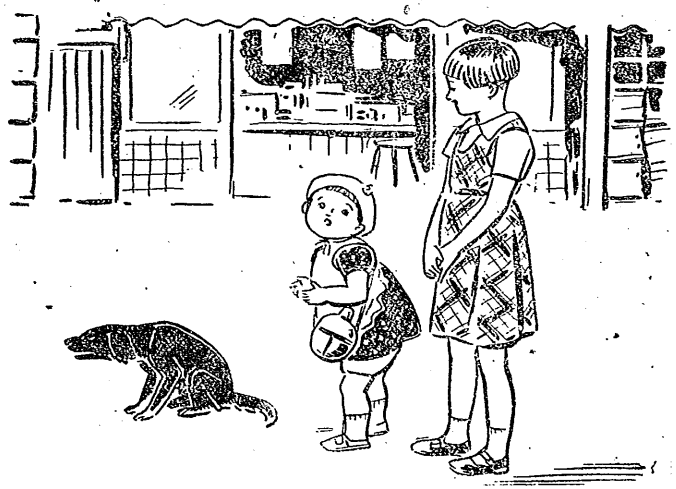
――アンヨ　ナメテルワ――クッチケルヨ――フッテ――ハイ――イラナイノ――オハナシシテ――ワンワン――ミテルワ　ウシロ――ワンワンチャン――モット――イコウ――アカチャン　ネテルワ――ゴメンクダサイッテ――ハイッテクノヨ――ワンワンチャン　ネテルワ――ワンワンチャン　タッチ　シタ――オスワリ　シタ――スイトウ　モッテ――オモタイカラ　モッテ　イッテ　アゲルノヨ――ワンワン　タッタ――ハナガ　サイテル――キントットガ――ア　ドコヘイッタノ――イコウ――アッポ　タイテル

よその人には、なんのことか、おそらくわからないでしょうが、そのときのいきさつを知っている私には、このことばの意味がよくわかります。

家からでてしばらくいくと、道のまん中に、黒いいぬが一びきすわっていました。「クロイ　ワンワン」は、そのときさけんだことばです。その黒いいぬに近よってみると、ひふ病にかかっていて、顔のあたりの毛が、ぬけていました。「キタナイ　ワンワンチャン」といったのは、そのためです。

黒いいぬは、まえ足をあげたかと思うと、その足をなめたので、妹はびっくりして、「アンヨ　ナメテルワ」といって、私に知らせたのです。いぬは、うしろ足をもちあげて、せなかをかくようなかっこうをしました。「クッチケルヨ」は、足をせなかに「くっつけるよ」というのです。そのとき、いぬは、くしゃみのようなことをして、「プッ」と息をはきました。妹は、わらいながら、「プッテ」と、ひとりごとをいいました。

母がこしらえてくださったパンを、ふくろからとりだして、いぬにやりながら、「ハイ」「ハイ」と、なんどもくり返しました。いぬは、まばたきをしたきりで、そのパンをたべようとしません。「イラナイノ」といって、いぬにたずねているのです。やはり、いぬは、ふり向かないので、たべるように、「オハナシシテ」という心らしいのです。とうとう、くるっと、うしろを向いてしまっ



たわけです。

「ワンワンチャン」と、こちらを向かせようとしたり、「モット」ここで遊んでいたいと、私にねだったり、そのくせ、でかけようといいだしたりしていましたが、やっと歩きはじめました。

五六歩いったかと思うと、よそのおばさんが、あかちゃんをおんぶして、そばを通りました。みると、なるほど、「アカチャン　ネテルワ」でした。

妹は、また、ちょこちょこ歩きだしましたが、よその家の門の中へ、はいっていこうとします。そのとき、私をふり向いて、「ゴメンクダサイッテ　ハイッテクノヨ」と、おとなびたことをいいました。

門からもどってきて、道にでたとき、あとをふり向きました。

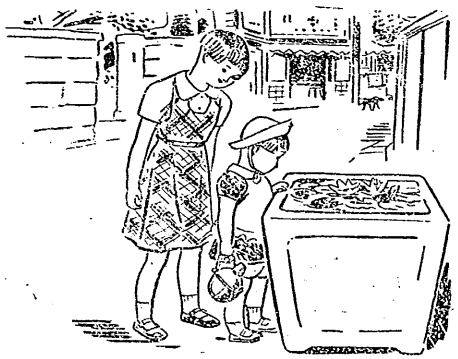
すると、さっきの黒いいぬが、ごろんと、地べたに横になってねそべっていました。「ワンワンチャン　ネテルワ」といっていると、いぬがもっくりおきました。「ワンワンチャン　タッチシタ」といって喜びました。「オスワリシタ」と、いちいち、いぬの動作をことばにして喜びました。

そのとき、いままでかたにかけていたすいとうをはずして、手に持つといいます。かたにかけると重いから手に持つのだと、ませたことをいって、歩きだしました。まだ、いぬが氣にかかるのか、ふり向くと、いぬは、立ちあがって、のそりのそりと、どこかへいくところでした。

あきらめて歩きかけると、水おけがありました。そこに、すいれんの花が三つほど、きれいにさいていました。妹は、そこ

へいって、水おけのふちにつかまって、水の中をのぞきました。きんぎょが一びき、すいすいとういてきたかと思うと、また、すぐ水そこへもぐりました。「ハナガ　サイテル」「キントットガ」「ア　ドコヘ　イッタノ」は、そのことをいいあらわしています。自分で、「イコウ」ときめてあるきかけると、道のわきで、たき火をしていました。そのけむりやほのおがおもしろいらしく、妹は、ここでまた、いろいろなものをながめるのです。

わずかのことばですが、この中には、妹のすがたが、ありありとうかんでいます。七五三の記念写真も、思いでにはなるでしょうが、ことばの記ろくは、妹の心の写真になるのではないかと、ふと、こんなことを考えました。



新しい世界

このごろ、私は、作文がすらすらと書けなくなりました。むりに書くと、自分がほんとうに思ったり、感じたり、考えたりしていることとは、ちがったものになります。

どうして、こんなふうにゆきづまってきたのでしょう。思うことがどんどんと書けていたまえのころが、うらやましくさえなりました。

あるとき、なにげなく妹の作文をみました。なんと、わけも

なく、すらすらと書いていることでしょう。すこしのこだわりもなく、ぐんぐんと書きつけているその力に、おどろきました。

かいこが、皮をぬいで新しく成長していくように、私も、ここで、いままでの作文のからをぬぎさって、新しい世界にふみだしていこうと思います。

妹の作文

○ ふくろう

私は、遊び時間にふくろうをみにいきました。そうしたら、二年生の男の子が、ふくろうのからだを手でいじりました。ふくろうは、目をくりくりさせて、とまり木の下におりていってしまいました。

男の子は、「おこった、おこった」といって喜びました。

○ コスモスの花

コスモスがさきました。

きれいにさきました。

白と、もも色と、こいもも色のがさきました。

いまはきれいだけれど、コスモスは、おじいさんになるとかわいそうね。

○　いちょうの葉

算数の時間に、先生が、はしごでいちょうの木にのぼって、いちょうの葉をたくさん落してくださいました。みんな負けずにひろいました。

うちに帰って、十まいずつたばにして、赤いひもでいわえて数えました。そうしたら、たばが十あって、五まいあまりました。

おとなりのよし子ちゃんと、なお子ちゃんに、三たばずつあげました。私は、のこったのをおし葉にしました。

○　お月見

私が、「おかあさん、ただいま。」といって、学校から帰ると、おかあさんが、

「ごはんをたべてから、すすきを取っておいて。」

とおっしゃった。ごはんをたべてから、山の方へいって、たくさん取ってきた。

えんがわにつくえをだして、その上にすすきをかざった。

月がでてきた。まんまるくてきれいだ。おかあさんに、
「そとへでて、あかちゃんにも、みせてあげて」
といったら、おかあさんが、あかちゃんをだっこして、おもての通りへでていらっしゃった。そうして、
「のんのさん、のんのさん」
とおっしゃった。私も、
「ほら、のんのさん、のんのさん」
といって、月の方へ手をやったら、あかちゃんは、
「あ、あ、あ」
といった。

○ たけのこ

うちのお庭に、たけのこが一本はえてきました。
私は、たけのこのそばにいって、せいくらべをしたら、はなのところまでありました。あしたもあさっても、せいくらべをしますよ。

もう、たけのこは、
私のせいをすぎて、お
にいさんのせいより高
くなりました。もう、
先生のせいくらい高く
なりました。
たけのこは、人間よりぐんぐん早く大きくなります。たけの

こは、どうして、あんなに早くのびるのでしょう。

きのう、風がふいて、ガサガサ音がしたから、なんだろうと思って、二階の窓からそとをみたら、大きな竹がにょっきりでていたので、びっくりしました。

もう、親竹と同じくらいに高くなって、風にゆれていました。

七　ぶ・す

能と狂言について

みなさんは、能というものをみたことがありますか。能を知らない人でも、おじいさんやおとうさんがおうたいになるうたいを、きいたことがあるでしょう。能は、そのうたいにつれて、役者が美しい舞を舞ったり、さまざまなしぐさをしたりするものですが、かぶきや、ほかのしばいとも、いろいろちがうところがあります。いちばんちがうところは、ふつうのしばいでは、役者がおじいさんになったり、むすめになったり、わかい男になったりするときには、おしろいやべにでけしょうをして、その役らしく顔をこしらえあげるのですが、能のほうでは、めんをつけます。

おじいさんのめん、おばあさんのめん、わかい男のめん、わかい女のめんと、それぞれの人物によって、それぞれのめんがあります。そのために、能は、めんの藝術ともいわれ、ヨーロッパの大むかしにさかえた、ギリシアの、同じめんの藝術とくら

べて、研究されています。

日本の絵画や、庭園や、建築にも、外國とはおもむきのちがったおもしろいものが、たくさんありますが、能は　その中でも、もっとも日本らしい、すぐれたところのあるものとなっています。みなさんも、大きくなったら、自分たちの國が持っているこのよい藝術を味わうことを、喜ぶだろうと思います。

能といっしょに、狂言というものが演じられます。狂言はめんをつけません。そうして、能が、美しさを現わそうとするのとちがって、狂言は、ひにくや、あてこすりや、すっぱぬきや、ひやかしなどで、できているといってもよく、それをみていると、世の中のうらおもてが、よくわかります。ことばも、能は、ゆう美ですが、狂言はそうではありません。

つぎの「ぶす」は、狂言の中の有名なものです。

狂言には、よく、太郎かじゃと次郎かじゃが、現われます。かれらは、だんなのねこかぶりをあばいたり、いたずらをしたり、また、とんでもないへまをやったり、だまされたりなど、よわい人間のしそうなことを、なんでもやります。めうえのいばったものに対してもおそれず、そうかといって、なにをしてもにくまれない、おもしろい人物になっています。

狂言「ぶす」

ある村に、けちんぼのだんながありました。おかみさんをもらえば、くらしにもお金がかかり、着物をきせたり、おこづかいをやったりしなければならないので、ずっと、ひとりでくら

していました。

あるとき、このだんなは、用事で、となり村までいかなければなりませんでした。でかけるとき、太郎かじゃ、次郎かじゃというふたりの下男に、「よくるすをするのだぞ」。といいつけ、それから、きびしい声でいいました。

「おくのへやのおしいれには、『ぶす』といって、おそろしいどくがはいっている。そちらからふいてくる風にあたっても、たちまち死ぬといわれるくらいだ。ふたりとも用心して、そばへもよらぬことだ。わかったか」。

「はい、はい。わかりました」。

太郎かじゃと次郎かじゃは、声をそろえて返事をしました。

そんなおそろしいどくで、死ぬようなことになってはつまら

ないから、太郎かじゃと次郎かじゃは、はじめは、そのへやの方へは、顔も向けないようにしていました。でも、こわいものはかえってみたくなります。それに、だんなは、ちょいちょいあのへやにはいるが、べつに、からだにさわりもしないのだから、自分たちも、そっといってみようということになりました。

「でも、風がどっきを運んできてはたいへんだから、次郎かじゃ、おまえは、せんすであおいで、風を向こうへやってくれ」。

「よしきた」。

次郎かじゃは、こしからぬきとったせんすを、さらりと開きました。

「さあ、あおげ、あおげ」。

「あおぐ、あおぐ」。

ふたりは、それをあいずのようにして、ぬき足さし足で、そっとおくのへやに近づき、さきに立った太郎かじゃが、思いきって、からかみをひきあけました。

「もっと強く、あおげ、あおげ」。

「あおぐ、あおぐ」。

「もっと強く、あおげ、あおげ」。

「あおぐ、あおぐ」。

次郎かじゃのほうが、太郎かじゃよりも、ずっとおくびょう者でした。それで、いよいよ、おしいれをあけるときになると、

「だいじょうぶかい、あぶなくはないかい」

と、ふるえ声でいいながら、いつでもにげだせるかっこうで、こしをうしろにひき、せんすの手だけをまえにつきだして、あ

おぎつづけていました。

そのうちに、太郎かじゃは、おしいれのたなのすみに、だいじそうにしまってあった、一つのまるいつぼをみつけ、へやのまん中にかかえてきました。

「なにかはいっているとみえて、重たい」。

「それこそ、どくの『ぶす』だよ」。

「それなら、もう、ふたりとも、どっきにあたって死んでいるはずじゃないか。それが、死なないのだから、『ぶす』ではない」。

「ふたを取ってみようか」。

「どんでもない。さあ、もとの場所において、あっちへいこう。ぐずぐずしているうちに、どっきにあたるにちがいない」。

「さあ、あおげ、あおげ」。

「あおぐ、あおぐ。」
思いきって、ふたをあけてみました。べつにどっきもたたず、かえって、うまそうなあまいにおいがして、黒っぽいものがはいっていました。
「こんなどくってありはしない。ひとつ、たべてみようじゃないか。」
「それだけはよしてくれ。なみたいていのどくではないから、かえって、うまそうにみえるのだよ。」
「かまわない、おれはたべてやる。」
ひきとめるひまもなく、太郎かじゃは、すばやく指をつっこんで、すぐそれを、口に持っていきました。
「なあんだ。さとうだ。」

「へえ。」
おくびょう者が、きゅうにいきおいづき、せんすをほうりだして、自分も指をつっこみました。
「ほんに、これは上等の黒ざとうだ。」
ふたりは、かわりばんこに指をつっこみました。そうして、うまい、うまいとなめているうちに、つぼが、からっぽになってしまいました。
「これは困った。だんなが帰ったら、どんな目にあわされるかわからない。」
おくびょう者の次郎かじゃは、心配になりました。太郎かじゃのほうは、氣が強いばかりでなく、わるぢえがあったから、おちつきはらい、

「おれに、うまいくふうがある。」
といいながら立ちあがり、いきなり、とこのまのりっぱなかけものをひきさきました。
「このうえそんならんぼうをしては、いっそうしかられるじゃないか。」
「まあ、まかせておけ。それから、おまえは、だんながだいじにしているあの湯飲み茶わんを、庭石にたたきつけろ。」
こう、さしずをされて、しかたなく、ずっしりと重い、大きな湯飲み茶わんを、ふみ石の上で、ガチャンとくだいてしまいました。
そこへ、だんなが帰ってきました。すると、太郎かじゃは、きゅうに両手で顔をおおい、おいおい大声をあげてなきだしました。次郎かじゃも、そのまねをして、おいおいなきだしました。
「いったい、ふたりともどうしたのだ。」
だんなは、あっけにとられてたずねました。太郎かじゃは、なおも、おいおいなきながらいいました。
「じつは、だんなさまのおるすのあいだ、私どもは、すもうをとって遊んでいました。私が負けて、ドサリととこのまにたおれたはずみに、あのたいせつなかけものを、あのとおりひきさいてしまいました。次郎かじゃは力があまり、茶だなの湯飲みをはねとばして、こなみじんにいたしました。あまりの申しわけなさに、ふたりとも、命をすてておわびをしようと考え、それには、大どくとうかがいました、おそろしい「ぶす」をたべて死ぬのが、いちばん早道と思ったのです。が、――」。

と、そこまで話したとき、いままでおいおいないていたくせに、きゅうに、にっこりわらい顔になって、次郎かじゃといっしょに歌いだしました。

「ひとくちくえども死にもせず、
ふたくちくえども死にもせず、
みくち、よくち、
ぶすはくえども、
死なれもせず」。

太郎かじゃと次郎かじゃは、こんな歌を歌いながらにげだしました。だんなは、おこって、

「にがすものか、にがすものか」。

と追いかけました。

狂 (62)	際 (39)	才 (37)	衣 (33)	現 (24)	形 (20)	愛 (7)
藝 (63)	殖 (42)	珠 (37)	械 (34)	吸 (25)	院 (21)	呼 (8)
術 (63)	科 (42)	然 (38)	想 (34)	無 (31)	着 (21)	節 (9)
建 (64)	的 (42)	核 (39)	館 (35)	責 (31)	護 (21)	商 (14)
築 (64)	産 (45)	成 (39)	設 (35)	任 (31)	婦 (21)	暗 (18)
有 (65)	湾 (45)	功 (39)	図 (35)	体 (32)	漁 (23)	読 (19)
対 (65)	敬 (46)	理 (39)	敗 (36)	部 (32)	坑 (24)	窓 (19)
等 (71)	能 (62)	論 (39)	試 (36)	織 (32)	員 (24)	円 (20)

K160,8-1-10

國語　第五学年　上

Approved by Ministry of Education
(Date Mar. 11, 1947)

昭和二十二年三月十一日　翻刻印刷
昭和二十二年三月二十日　翻刻發行
（昭和二十二年三月十一日　文部省檢査濟）

著作權所有

著作兼發行者　文部省

東京都北區堀船町一丁目八五七番地
翻刻發行兼印刷者　東京書籍株式會社
代表者　井上源之丞

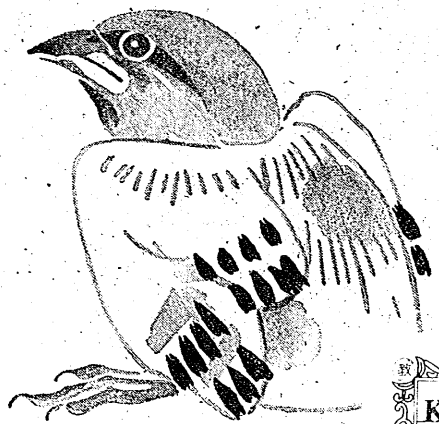
東京都北區堀船町一丁目八五七番地
印刷所　東京書籍株式會社

東京都北區堀船町一丁目八五七番地
發行所　東京書籍株式會社

1983年度
購入　文生書院

國語

第五学年　中



K160.8
1
11